

## 天使のくれた時間（2000年、アメリカ映画）

（ジャック：ニコラス・ケイジ、ケイト：ティア・レオーニ）

— あの時「YES」と答えていたら、2人はどこにいたのだろうか

— 愛よりもサクセスを選んだ男に訪れた奇跡の時間

ウォール街で成功をおさめ、高級マンションに住み、フェラーリを乗り回す、誰もがうらやむ人生を走り続けてきた主人公、ジャック・キャンベル。そんな彼がある日、不思議な青年によって“もう一つの人生”に導かれる。それは13年前に恋人のケイトと結婚し、タイヤのセールスをしながら2人の子供を養っている平凡な“ファミリーマン”としての人生だった。戸惑いながらも次第に、成功をつかむことしか頭になかった自分の心に、人間らしい素直な感情が芽生えてくるのを感じるジャック……。

1987年。ロンドン行き2便の最終搭乗案内。

ジャック：さよならは言わないよ。僕たちに別れはない。いいね。じゃあ、行くよ。

ケイト：待って。何だかすごくいやな予感がするの。

ジャック：飛行機の事？墜落するなんて言うなよ。やめてくれよ。

ケイト：確かに私たちは何度も話あって決めたわ。あなたのロンドン行き

は2人のためになるって。でも心のどこかで間違っている気がする。行かないで、ジャック。

ジャック：イギリスへかい？銀行での研修はどうなるんだい？

ケイト：これがあなたにとって大きなチャンスだってことはよく分かるわ。

ジャック：2人にとってだ。

ケイト：そうね。でも行ってしまったらすべてが終わりそう。

ジャック：空港っていうのは誰でも感傷的になる場所なんだ。今はただ僕らが出した結論を信じるしかない。君はこの国で最高のロースクールで学び、僕はバークレー銀行で研修、すごい計画で、幸せな未来が待っている。

ケイト：幸せな未来がほしいのなら今この瞬間から2人の生活を始めましょう。どんな人生になるか分からないけれど。でも2人が一緒にいることだけは確かよ。私はそっちを選びたい。仕事だけじゃあ、幸せにはなれないわ。2人が一緒にいてこそ幸せになれるんじゃない？

ジャック：ロンドンに1年行ったくらいでこの気持ちは変わらない。100年行ったってかわりはしないよ。・・・

.....

(13年後)

秘書：オクスフォードから電話が。

ジャック：ケイト・レイノルズ？

秘書：8時にはご自宅にもどっていらっしゃるそうです。

ジャック：学生時代の恋人だ。結婚を約束していた。もし、していたら、  
今頃はハットン社でブローカーをやっていた。ロンドン行きを反対されて  
空港で行くのを引き止められた。

秘書：彼女に電話しますわ。

ジャック：やめろ。

秘書：結婚の約束をした女性ですよ。電話の理由が気にならないの？

ジャック：ちょっと感傷的になっただけさ。イブで1人になったんで、昔  
の男を思い出したんだろう。わざわざ、かけなおせば、かえて混乱させ  
るだけだ。そっとしておこう。もう大昔に終わったことだ。

会長：クリスマスイブの8時35分、ジャック・キャンベルはまだデスク  
にいる。……

……

ケイト：飛行機に乗った時はもう終わりだと思った。これでもうあなたに  
は会えないと思ったわ。そしたら、次の日突然現われて、あんな嬉しい  
ことなかった。私あなたの決断を考えてみたの。すごく子供っぽいかも  
しれないけれど、私はこの家で一緒に年老いていけると信じてた。ここ

であなたと休日を過ごしていると、私たちの孫が遊びにやってくるのが、はっきり目に浮かんだの。私達の髪は灰色になり、顔は皺だらけ、私は庭いじりをして、あなたはペンキを塗っているの。

．．．．

ジャック：僕らはジャージーに住んでいる。子供は2人。アニーとジョシュだ。アニーはバイオリンが下手でも一生懸命練習をしている。少しませているが、何でもはっきり言うがそれは利口な証拠だ。ジョシュの目は君にそっくりだ。まだ話せないけど絶対に頭がいい。目をぱっちりあけ、いつも僕たちを見ている。毎日新しい何かを勉強していることが奇跡をみているようだ。家は汚いけれど、僕らのものだ。あと122回でローン終了。君は無料の弁護士。そうだ。完全に非営利でやっているが、君は気にもしていない。僕たちは結婚して13年なのにまだアツアツだ。愛していると言わないと触れさせてもくれない。君は僕よりいい人間だ。一緒にいると僕までいい人間になれる。．．．．

みんな夢だったのかも知れない。12月の孤独な夜が生んだ幻想なのかも．．．．

